九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

中国の考古資料にみられる拍手

陳，晟宇
九州大学大学院芸術工学府芸術工学専攻コンテンツ・クリエーティフ゛テ゛サ゛インコース

矢向，正人
九州大学大学院芸術工学研究院コミュニケーションデザイン科学部門

https://doi.org/10.15017/4773087

出版情報：芸術工学研究. 36, pp.13-27, 2022-03-01. 九州大学大学院芸術工学研究院
バージョン：
権利関係：

資料

受付日：2021 年 11 月 1 日、受理日：2022 年 1 月 14 日

中国の考古資料にみられる拍手

Hand Clapping Found in Chinese Archaeological Materials

陳　晟宇 [1]　　矢向正人 [2]
CHEN Shengyu　　YAKO Masato

Abstract

This paper examines the origins of clapping through Chinese archaeological materials. The authors found clapping figures in archaeological artifacts from the Warring States (475-221 BC) to the Sui Dynasty (581-618). This paper has identified fifty examples of artifacts that appear to be figures in the process of clapping or may depict clapping in archaeological artifacts from the Warring States to the Sui Dynasty. Since some of the artifacts have a high likelihood of showing clapping and others have a low likelihood, we first ranked them according to their likelihood using the available materials and reports. Next, we examined the characteristics of the shapes and depictions in these objects, and how they were expressed. The results showed that there were many examples of clapping to music or as part of a performance, but not so many examples of clapping hands for admiration by the audience. We also confirmed that there were various ways to depict clapping, such as the positional relationship between the hands and the body, the way the hands are spread, and the direction of the hands.

連絡先：矢向正人，yako@design.kyushu-u.ac.jp
1 九州大学大学院芸術工学府芸術工学専攻コンテンツ・クリエーティブデザインコース
Content and Creative Design Course, Department of Design, Graduate School of Design, Kyushu University
2 九州大学大学院芸術工学研究院コミュニケーションデザイン科学部門
Department of Communication Design Science, Faculty of Design, Kyushu University

1. はじめに

本稿は、拍手することの起源について、中国の考古資料を対象に検討する。拍手は、両掌を合わせるという行為と、音を発するという行為とから成る。このことを踏まえ、本稿では、漢代及びそれ以前の考古資料から、音を発するために手を拍つという仕草を造形することを意図し、あるいはその仕草が描かれている可能性がある例を取り上げ、それらの造形や描写について、どのような特徴や表現方法があるのかを検討した。

中国古代の文献において拍手と解釈される記述が現れる最古のものは、戦国時代（前 475-前 221）に書かれたとされる『周礼』及び、同時期の『韓非子』（前 280 頃-前 233 頃）である（秦・矢向 2017:25，矢向 2021:25）。漢代になると、『戦国策』（前 168 頃-後 8 頃）に、手を拍つとする記述が複数箇所みられる。また、『史記』（前 104-前 91）には、拍手よりも手拍子が拍たれたと解釈される記述がみられる。『史記』「世家」には、「初趙盾在時 夢見叔帶持要 而哭甚悲 已而笑 拊手且歌 盾卜之 兆絶而後好[*1]」（趙盾がまだ在世のとき、夢で、先祖の叔帶が腰を支えながら哭泣して甚だ悲しげであったが、ややあってから笑い、手を拍って歌ったのをみた。盾が占ってみると、その兆象に「家が断絶するが、のちに又栄える」とでた）（吉田 1979:576-577，秦・矢向 2017:27）とあり、この時代に拍手あるいは手拍子をとる習慣が存在したことがわかる。これらの記述を背景に、本稿は、漢代を中心とする考古資料を対象に、拍手あるいは手拍子をとることが象られている可能性がある例についての調査結果を報告する。

2. 中国考古学研究の現状

漢代において、拍手する動作が明確に認識されていたとするなら、その時代に拍手を造形した遺物が存在しても不思議はない。しかし、それを考古資料から見いだすことは容易ではない。本稿で取り上げる出土遺物においても、確かな情報を入手できていない例が多い。筆者の 1 人は 2019 年 8 月に、河南省、浙江省、上海に現地調査に赴き、俑などの考古資料に関する情報入手を試みたが、そこで困難に直面することになった。

まず、中国における考古学資料の現状について述べておこう。張慶捷の『考古発掘報告積圧問題』によると、中国における考古学の発掘調査は 1920 年に始まるが、大規模な発掘調査は 1979 年の改革開放後からである。以後の 30-40 年間に、中国全土で数多くの考古学プロジェクトが実施されている。しかし、張によると、約半数の考古学調査プロジェクトおよび遺跡発掘において、調査終了後においても発掘報告書が編集・出版されていない（張 2011：13）。この理由は、出土した遺物資料の整理が十分に進められていないためであるとされている。また、王先勝の「中国考古学的現状 任務及未来趨勢：古代紋飾与古代研究新趨勢」によると、これまで資料整理が未完であるために発掘報告書が公開されていない調査プロジェクトおよび遺跡発掘が、1 万件以上存在する(王 2019:130-141)。中国考古学におけるこれらの問題点について、考古学者の李済は、まず、1960 年以前の報告書には、発掘場所、発掘状況、寸法、材質などの具体的なデータが記されておらず、それらの多くは学術的な研究と言えるものではないと述べたうえ（徐 2005:131-132）、1963 年の半坂遺跡の発掘報告以後には、改革開放後の大規模発掘調査などを挟んで、状況は少しずつ改善しているものの、多数の出土遺物が、現在に至るまで発掘報告書が公開されずに滞積している状況であると述べている（徐 2005:132）。考古資料を扱うにあたっての以上のような制約があるために、本稿で取り上げた出土遺物において、明確なデータが得られていない例が多くあることをまず指摘しておく。

3. 漢代における拍手の俑

本稿で取り上げる遺物の主たるものは、拍手する姿を造形した「俑」である。中国では、特に高位者や富裕層が埋葬される場合、大墓を建てるだけでなく、生前に好まれた品々や貴重品、死者のために制作された器物が副葬品として埋葬されることがある。これらの特別な器物は明器と呼ばれる。明器は車、家具、家屋、家禽類などを造形したものが多いが、人間を造形した明器が「俑」である。俑には木製、玉製、石製、銀や銅などの金属製がある。その製作技術や表現方法は、時代や出土地域により異なるが、俑の中には、音楽を演奏する姿を造形した「楽俑」が存在する。楽俑の多くは楽器を演奏する姿が造形されているが、掌を拍っているように見える俑も少数ながら見出だすことができる。それらの関連資料には、以後本稿で述べるように「拍手俑」と記されている例がある。しかし、これまで拍手俑そのものに焦点を当てた先行研究はみられない。本稿では、拍手俑を中心に検討していくが、俑以外の考古資料についても論じている。

4. 本稿の記述方法

筆者は、戦国（前 475-前 221）から漢代（前 206-後 220）を中心とする考古遺物を対象に、拍手を造形あるいは描いたと考えられる遺物を限なく調査した。調査した資料は、CNKI（China National Knowledge Infrastructure）、WANFANG DATA（万方データベース）、BAIDU（百度文庫）、SINA（新浪新聞）、DOC88（道客巴巴）等のデータベース、遺物に関する発掘報告書、研究論文、雑誌記事、考古学の専門書である。この他、河南省、浙江省、山西省、四川省、安徽省、陝西省、雲南省の博物館のウェブサイト、博物館の研究者へのインタビューも調査の手がかりにした。この結果、現在までに、拍手の姿に類似する遺物を 49 例確認した。しかし、それらは拍手に類似する遺物とまでは言うことができるとしても、実際に手を拍つ姿が造形されているのかについて判断するには困難を伴う。その理由は、拍手の姿に類似する遺物には、手を前に出していても、物を持っている姿勢と区別がつきにくい例があり、また、手を合わせていると考えられても、拍手であるのか合掌であるのかが判然としない例が多いからである。両掌を合わせるという姿勢は、拍手に、物を持つ姿勢の他に、合掌や拱手と解釈する可能性を含み持たせてしまう。さらに、両掌を拍っていると判断されても、手拍子として拍つのか拍手として拍つのかの見極めは困難である。本稿で以下に提示する 49 例には、拍手である可能性が高いものから低いものまでがある（表 1*2）。

本稿では、まず、合掌や拱手との区別については検討から外し、この 49 例における、拍手する遺物である可能性の度合いについて、極めて高い、高い、ある程度、低い、この 4 つの分類基準で判断した。この基準に基づいて対象とする 49 例を分類した。分類に際しては、筆者の主観を減らし、報告書の有無やその内容を重視することに努めた。

判断基準について説明する。遺物に関する関連資料として、発掘報告書を 2 点、研究論文、雑誌記事、博物館における判断、筆者 2 人の判断をそれぞれ 1 点とし、合わせて 4 点以上で拍手と判断されている遺物であれば、「拍手である可能性が極めて高い」と判断した。次に、合わせて 3 点以上で拍手と判断されている遺物であれば、「拍手である可能性が高い」と判断し

た。次に、発掘報告書に拍手と記されておらず、関連資料 1 点のみに拍手と記されており、且つ筆者も拍手の可能性があると判断した遺物であれば、「拍手である可能性がある」と判断した。また、関連資料に拍手と記されておらず、写真のみから拍手の可能性を指摘できる遺物についても、「拍手である可能性がある」に含めた。得点は低くても、筆者による 2019 年の現地調査などの判断により、拍手である可能性を高く評価した例があることを付記しておく。この他、「拍手であるとする言説があるが、写真で確認できない遺物」についても記した。なお、本稿では、関連資料に「拍手俑」と記されている場合にはそのまま「拍手俑」の

表 1　中国の考古資料にみられる拍手

番号	名称	発掘地	時代	手の位置	両掌の形	両手間の距離	両掌の関係	両掌の向き	姿勢	性別	表情	遺物の評価	拍手の可能性	備考
5.1.1	西漢複釉陶坐俑-1	河南済源	前漢	胸先離	標準	離	左右対称	相対	正座	女性	不明	論=3、博=1、筆=2	極めて高い	
5.1.1	西漢複釉陶坐俑-2	河南済源	前漢	胸先離	標準	離	左右対称	相対	正座	女性	不明	論=3、博=1、筆=2	極めて高い	
5.1.2	漢復釉陶婦人俑	河南済源	漢代	胸先離	標準	離	左右対称	上開	正座	女性	不明	報=2、博=1、筆=2	極めて高い	
5.1.2	漢復釉陶拍手俑	河南済源	前漢	胸先離	標準	離	左右対称	上開	正座	不明	不明	報=2、博=1、筆=2	極めて高い	
5.1.3	西漢趙氏孤児図	洛陽	前漢	胸先離	不明	離	上下	相対	直立	男性	笑い	記=1、筆=2	極めて高い	評価の特例
5.1.4	紅釉舞楽俑群	河南済源	後漢	胸先離	標準	離	左右対称	上開	正座	男性	笑い	報=2、論=1、筆=2	極めて高い	
5.1.5	洛寧東漢陶俑群	河南洛寧	後漢	胸先近	交差	近	右上左下	相対	膝立	男性	笑い	報=2、筆=2	極めて高い	
5.1.6	北魏彩絵雑技胡俑	大同雁北	北魏	顔先	不明	離	左右対称	相対	直立	男性	笑い	論=1、記=1、筆=2	極めて高い	
5.1.7	西漢撃掌緑褐釉陶俑/西漢撃掌褐釉陶俑	不明	前漢	胸先離	緑不明/標準	離	左右対称	相対	正座	女性	不明	論=1、博=1、筆=2	極めて高い	緑は左手欠
5.1.8	仙人六博図石函	四川新津	不明	頭上	不明	離	不明	外開	正座	不明	不明	記=4、博=1、筆=2	極めて高い	
5.1.8	東漢緑釉六博俑	河南霊宝	後漢	顔先離	標準	離	左右対称	相対	膝立	男性	不明		極めて高い	
5.1.8	東漢六博俑	不明	後漢	胸先離	交差	近	右下左上	右上左前	胡座	不明	笑い		極めて高い	右水平左垂直
5.1.9	彩絵陶楽舞俑	不明	不明	胸先離	標準	離	左右対称	外開	正座	女性	不明	記=1、筆=2	極めて高い	評価の特例
5.1.10	済源東街明代壁画	済源東街	明代	胸先離	標準	合	左右対称	相対	直立	女性	なし	報=2、筆=2	極めて高い	
5.2.1	西漢複釉陶打拍俑	河南済源	前漢	顔先離	標準	離	左右対称	内開	直立	女性	不明	論=1、博=1、筆=1	高い	
5.2.2	彩絵百戯陶俑	洛陽	後漢	胸先離	交差	離	左上右下	外開	正座	不明	不明	記=1、筆=2	高い	
5.2.3	陶舞楽雑技俑	済源泗澗沟	後漢	胸先離	標準	離	左右対称	相対	正座	不明	不明	論=2、筆=1	高い	
5.2.4	将軍俑と拍手俑	四川自貢	不明	胸先近	標準	離	左右対称	相対	直立	女性	なし	記=1、筆=2	高い	
5.2.5	北斉黄釉磁扁壺	河南安陽	北斉	顔先離	標準	離	左右対称	外開	直立	女性	なし	論=1、筆=2	高い	
5.2.6	東漢婺州窯青瓷堆塑罐	浙江武義	後漢	胸先離	標準引き	合	左右対称	相対	不明	男性	笑い	筆=2	高い	評価の特例
5.2.7	婺州窓青釉堆塑人物罐	浙江武義	三国(呉)	胸先離	標準引き	合	左右対称	相対	不明	男性	笑い	論=1、筆=2	高い	
5.2.8	宴飲奏楽画像磚	河南新野	後漢	胸先	標準	離	左右対称	相対	正座	女性	不明	博=1、筆=2	高い	
5.2.9	漢代画像石祠	安徽淮北	漢	胸先離	不明	離	不明	不明	正座	男性	不明	報=2、筆=1	高い	
5.2.10	宴楽図	陝西靖辺	後漢	胸先	標準	離	左右対称	不明	正座	女性	不明	報=2、筆=1	高い	
5.3.1.1	陶舞俑与陶楽俑	広東広州	後漢	胸先	標準	離	左右対称	相対	座	女性	なし	博=1、筆=1	ある	
5.3.1.2	四人楽舞銅飾牌	雲南晋寧	漢	胸先離	不明	離	左右対称	外開	直立	女性	笑い	論=1、筆=1	ある	
5.3.1.3	漢画像石	不明	漢	胸先	不明	不明	不明	不明	正座	男性	不明	記=1、筆=1	ある	
5.3.1.4	敦煌壁画254窟	敦煌	北魏	首先近	標準	近	左右対称	相対	不明	不明	笑い	記=1、筆=1	ある	
5.3.1.5	奏楽舞蹈図	陝西西安	北周	胸先	不明	不明	不明	不明	直立	男性	なし	論=2	ある	片手のみ
5.3.1.5	奏楽宴飲舞蹈図	陝西西安	北周	胸先	不明	不明	不明	不明	直立	男性	なし		ある	
5.3.1.6	拍手高歌女坐俑	陝西西安	北朝	顔先近	標準	離	左右対称	相対	正座	女性	なし	報=2	ある	
5.3.1.7	彩絵陶院落	河南淮陽	後漢	胸先近	交差	近	左下右上	相対	正座	男性	なし	報=1、筆=1	ある	
5.3.1.8	銅鼓残片笙歌紋飾	雲南晋寧	漢	胸先離	不明	離	左右対称	外開	直立	女性	笑い	論=1、筆=1	ある	
5.3.1.9	戦国水陸攻戦紋銅壺	四川成都	戦国	胸先離	不明	離	左右対称	相対	直立	女性	不明	記=1、筆=1	ある	両腕を前方に伸ばす
5.3.1.10	司馬金龍墓女楽俑	山西大同	北魏	胸先近	交差？	離	左下右上	不明	正座	女性	笑い	論=1、筆=1	ある	左手欠
5.3.2.1	七槃舞（煉瓦画像）	山東沂南	後漢	首先離	不明	離	左右対称	不明	直立	不明	不明	論=1、筆=1	ある	
5.3.2.2	楽舞飲茶画像	河南南陽	後漢	胸先	不明	不明	不明	不明	正座	男性	不明	記=1	ある	
5.3.2.3	楽舞図（漢画像石）	浙江徐州	後漢	不明	不明	不明	不明	不明	座	不明	不明	記=1	ある	
5.3.2.4	北壁二原石	山東微山	漢	胸先	不明	離	不明	不明	座	不明	不明	論=1	ある	
5.3.2.5	甘粛酒泉丁家閘墓室壁画	甘粛酒泉	晋十六国	胸先	不明	不明	不明	不明	座	女性	不明	論=1	ある	
5.3.2.6	西安北周涼州薩保史君墓「北壁浮彫」	陝西西安	北周	胸先	不明	離	不明	相対	直立	不明	不明	報=2	ある	
5.3.2.7	宴飲百劇図「打虎亭」	河南新密	漢	不明	不明	不明	不明	不明	正座	男性	不明	論=1	ある	
5.3.2.8	撫琴・長袖・出喪	江蘇徐州	漢	不明	不明	不明	不明	不明	座	女性	不明	記=1	ある	
5.3.2.9	彩絵陶舞蹈俑	河南済源	後漢	頭先	標準	離	不明	外開	直立	男性	笑い	論=2	ある	
5.3.2.10	彩絵百戯楽舞陶俑群	河南	漢	胸先離	標準	離	左右対称	相対	正座	不明	不明	論=1、筆=1	ある	
5.3.2.11	対牛弾琴図	不明	後漢172年	胸先	不明	不明	不明	不明	座	牛	不明	(記=1)、筆=1	ある	
5.3.2.12	孔子拝老聃図	江蘇徐州	漢	胸先	不明	不明	不明	不明	直立	不明	不明	博=1、筆=1	ある	
5.4.1	南陽七里園鐘鼓管弦楽団画像石	河南南陽	後漢	不明	不明	不明	不明	不明	正座	不明	不明		不明	
5.4.2	新野樊集撃鼓歌唱画像磚	新野樊集	前漢	不明	不明	不明	不明	不明	直立	不明	不明		不明	

呼称を用いて論じているが、本稿における「拍手俑」は、あくまで「拍手しているように見える俑」、「拍手が造形されている可能性がある俑」の意味である。

5. 調査した拍手関連資料

5.1 拍手である可能性が極めて高い遺物

5.1.1「西漢複釉陶坐俑」2 体（現地調査済）

2003 年に河南省済源市の文物部門は沁北電工場の建設に協力するため、西窯頭村の漢墓群の発掘調査を緊急に行った。この M10 墓から前漢末期（前 206-後 8）の「歌舞伎楽俑群」6 体が出土したが、その中の 2 体「西漢複釉陶坐俑-1」「西漢複釉陶坐俑-2」は拍手を造形している可能性があると考えられている。「西漢複釉陶坐俑-1」は、横幅 8.2cm、前後の幅 8.7cm、高さ 15cm である。「西漢複釉陶坐俑-2」もほぼ同じで、頭部に少し歪みがある。これらの俑は、済源博物館が「歌舞伎楽舞群」と名付けた俑群の一部であるが[*3]、その他の、吹蕭俑、吹笛俑、舞女俑、弾琴俑とともに、現在は済源博物館に保管されている。「西漢複釉陶坐俑」の 2 体について、同博物館館長の胡成芳は、『泥土之魂：済源漢代陶器』(胡 2015:102)で、俑の胴体は緑色、正座姿、表情が自然で高い三角形の帽子を被っているとのみ紹介するにとどめ、拍手の造形の有無については言及していない。しかし、この 2 体については、複数の文献で拍手を造形した俑であると言及されている。李彩霞の「済源西窯頭村 M10 出土陶塑器物鑑賞」（李 2010:101-104）、李暁音の「済源出土漢代陶俑的美感表現」（李 2015:53-56）、及び劉恵「済源出土的漢代舞楽俑浅析」(劉 2017:8-12)は、これらの 2 体が両手を胸先に上げ、平行に向け、音楽に合わせて手を拍っていると記している。俑を見ると、両手を、肘を曲げた状態で胸先の高さに水平に出している。両腕の幅は、肩幅とほぼ同じで、親指は他の 4 本の指と分かれている。現在における通常の拍手と同じ姿勢でもあり、拍手が造形されている可能性が極めて高いと考えられる。一方、「済源西窯頭村 M10 出土陶塑器物鑑賞」(李 2010:101-104)「済源出土漢代陶俑的美感表現」(李 2015:53-56)、には、6 体の俑は一組であると指摘されている。「西漢複釉陶坐俑」2 体は、楽器と舞手の俑と一組の俑であるため、拍手が造形されているとすれば、演奏の一部としての手拍子が造形された俑である可能性があると考えられる。

図 1.1 西漢複釉陶坐俑-1
「済源博物館」

図 1.2 西漢複釉陶坐俑-2
「済源博物館」

5.1.2「漢復釉陶婦人俑」及び「漢復釉陶拍手俑」（現地調査済）

1991 年に河南省済源市の桐花溝十号漢墓に出土した漢代（前 206-後 220）における「漢復釉陶婦人俑」で、貴族の婦人が造形された俑である。現在の保管場所は不明である。『考古』2000 年第二期に掲載された発掘報告書「河南済源市桐花溝十号漢墓」(河南文物考古研究所:78-88)には、「漢復釉陶婦人俑」として、「俑の上に赤い垂胡短衣を着て、腰に黒い帯を締め、下に白いロングスカートを穿き、全体的に造型と装飾が典雅である」と記されている。同じ漢墓から発掘された、舞俑 1 体、演奏俑 3 体、歌手俑 1 体、童僕俑 1 体と合わせて 7 体一組の俑群を成すものであるが、楽器や舞手の俑と一体の俑であるため、手を拍つ姿を造形した俑である可能性が極めて高いと考えられる。また、「漢復釉陶婦人俑」は、演奏に関わらない童僕を造形した童僕俑と発掘位置が近接しているため、演奏の一部としての手拍子である他に、称賛のために拍手している可能性も考えられる。

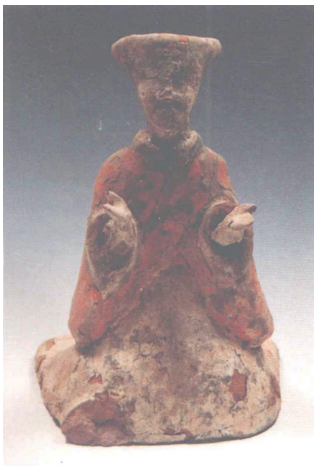

図 1.3 漢復釉陶婦人俑『河南済源市桐花溝十号漢墓』2000

「漢復釉陶婦人俑」とほぼ同じ形状の俑が、2009 年 3 月 30 日に河南省済源市の天壇柴庄 M9 で出土した「漢復釉陶拍手俑」である。済源博物館の展示におけるキャプションに[*4]、「漢復釉陶拍手俑」と明記されている。横幅 10cm、前後の幅 10.1cm、高さ 10.9cm、正座し、両手を胸に構え、掌を向き合わせ、四本の指を揃えて拍手している。

図 1.4 漢復釉陶拍手俑
「済源博物館」

「漢復釉陶拍手俑」には発掘報告書が見つからないが、年代も造形も「漢復釉陶婦人俑」と同じと言ってよく、拍手が造形されている可能性が極めて高いと考えられる。

5.1.3「西漢趙氏孤児図」

河南省洛陽王城公園で出土した「西漢趙氏孤児図」であり、発掘時期は不明。写真は「趙氏孤児図」の一部分である。拍手しながら笑っている老人が描かれているが、画面全体には 4 人が配置されている。『史記』の「趙氏孤児」によると、老人は医者の韓爾であり、趙氏孤児の趙武に向けて手を拍っている。老人の表情は複雑である。BAIDU（百度文庫）[*5] には、現物の図は、縦 25cm、横 194cm とあるが、現物の所在が不明であり、関連資料も BAIDU の他には見出だすことができない。成立時期も明確でなく捏造されたものである可能性もないわけではないが、拍手する人物が特に精細に描き出された資料であるため、可能性が極めて高いに含めた。

図 1.5 西漢趙氏孤児図『BAIDU』

5.1.4「紅釉舞楽俑群」（現地調査済）

1969 年 11 月に河南省済源泗澗溝 M8 墓で出土した東漢の百戯場面を描いた「紅釉舞楽俑群」の 1 体であり、現在は河南博物館に保管されている。「済源泗澗溝三座漢墓的発掘簡報」には、吹奏楽俑 3 体、拍手俑 1 体、指揮俑 1 体、舞俑 2 体、雑技俑 1 体の、7 体一組で出土とあるが（河南省博物院 1973:50）、5 体のみ公開されている。高さは、21.5cm から 17.5cm まであるが、すべて紅陶で、正座している。右から 2 体目の俑が、口を開けて笑い、両手を上げ、掌を合わせ、拍手しているように見える。2017 年 12 月の済源職業技術学院学報に掲載された「済源出土的漢代舞楽俑浅析」（劉 2017:11）及び「済源泗澗溝三座漢墓的発掘簡報」（河南省博物院 1973:52）には、俑の 1 体は手拍子として手を拍っていると記されている。

図 1.6 紅釉舞楽俑群『済源出土的漢代舞楽俑浅析』2017

5.1.5「洛寧東漢陶俑群」（現地調査済）

1980 年に河南省洛寧県の黄溝湾村に出土した後漢時代中後期における雑技を描いた「洛寧東漢陶俑群」の 1 体である。すでに筆者の 1 人により言及されているが、同地で発見された 3 体のうちの 1 体であり、現在は公開されていない（矢向 2021:29）。1987 年 1 月の「河南洛寧東漢墓清理簡報」（張 1987:39）には、高さ 12cm の鼻の高い人物が、跪坐し、尖った帽子を被り、前を向いて拍手している姿であると記されている。5.2.2 の「彩絵百戯陶俑」の拍手俑と同様の両掌を開いた交差拍ちであり、現代でもよく見られる拍ち方である。「彩絵百戯陶俑」の俑との違いは、この俑が上腕をあげて拍つ姿勢であることである。

5.1.6「北魏彩絵雑技胡俑」

2013 年に山西省大同市の曹夫楼村に出土した北魏時代（386-534）の雑技を描いた「北魏彩絵雑技胡俑」の 1 体であり、現在は山西省博物館に保管されている（矢向 2021:29）。「大同雁北師院北魏墓群」には、演技する中央の人物を 6 人が取り囲み、楽器を演奏していると記されている（劉 2008:53-55）が、2013 年 7 月 7 日に雑誌「SHANXIYOUTH」に掲載された記事には、この 6 名は、拍手喝采していると記されており（2013:8）、BAIDU [*6] にも同様の記述が見られる。それぞれの俑の形状から前者が正しいと考えられるが、6 体の俑のうち、右から 2 体目の俑は、この姿勢に対応する楽器を想定できず、手を拍っていると考えられる。左から 2 体目が、口を開いており、声を掛けていると考えられることからも、右から 2 体目が手を拍っているとする判断は妥当と考えられる。

5.1.7「西漢撃掌緑褐釉陶俑」及び「西漢撃掌褐釉陶俑」

2018 年第 2 期『理財・収蔵版』に掲載された呉艶麗の「許昌博物館藏百戯俑賞析」によると、現在、許昌博物館に前漢の拍手俑が 2 体保存されている。発掘時期、発掘場所は不明であるが、舞俑 3 体、吹奏俑 3 体、俳優俑 2 体、拍手俑 2 体の 10 体一組における 2 体であり、ともに、横幅 8cm、前後の幅 9cm、高さ 11.5cm である。呉は、「西漢撃掌緑褐釉陶俑」は婦人、「西漢撃掌褐釉陶俑」は少女であるが、ともに楽舞を見ながら拍手喝采していると述べている（呉 2018:38-42）。筆者の検討では、2 体はともに座しているが、

図 1.7 西漢撃掌緑褐釉陶俑（左）西漢撃掌褐釉陶俑（右）『許昌博物館藏百戯俑賞析』2018

図 1.8 拍手俑「許昌博物館」

服、帽子、胴の色がそれぞれ異なることから、2 体とも手拍子、1 体が手拍子でもう 1 体が称賛の拍手、2 体とも拍手、以上のどの可能性もあると考えられる。「西漢撃掌緑褐釉陶俑」は、手先を丸めているように見える。なお、許昌博物館ホームページ[*7]には、上記 2 体以外にも高い帽子を被り手を拍っているように見える 1 体の拍手俑が確認できる。同じく前漢の俑であり、横幅 7cm、前後の幅 6.5cm、高さ 14.5cm、展示のキャプションには拍手俑とあるが、左手首が欠けており、手を拍っている可能性がないわけではないが、不明な点が多い。

5.1.8「仙人六博図石函」及び「六博俑」2 体

1950 年に四川省新津県老君山崖墓で出土した後漢（25-220）における「六博」の対局を描いた壁画「仙人六博図石函」であり、現在は四川博物館に保管されている[*8]。仙人 2 人による六博の対局場面が描かれているが、勝者は両手を高く上げ、喜んで手を拍とうとしているように見える。勝者は拍手でなく「万歳」をして喜んでいるようにも見えなくはないが、図は拍手をしていると判断した。その理由は、「六博」対局における拍手を造形している次の俑 2 体が存在することによる。

図 1.9 仙人六博図石函「四川博物館」

図 1.10 は、1972 年に河南省霊宝県で発掘された「東漢緑釉六博俑」である。現在の保管場所は不明であるが、六博の対局を描いた人物が造形されている。『文物』に掲載された発掘報告書「霊宝張湾漢墓」（楊・張・趙 1975：80）には、2 人が対局しているとのみ記載されているが、写真を見ると、右側の人物の手の位置は顔の前にあるため、「万歳」の可能性は考えられず、拍手の可能性のが極めて高い。

図 1.10 東漢緑釉六博俑『霊宝張湾漢墓』1975

図 1.11 は大英博物館が収蔵している「東漢六博俑」である。左の人物は高さ 19cm、横幅 13.5cm、前後の幅 11cm、右の人物は高さ 19cm、横幅 15.5cm である。2 体は向き合って座り、右の人物は両手を胸先まで上げ、左手を上、右手を下にしている。両掌を向き合わせて拍手しているように見える。もう 1 体は両手を顔前に挙げ、掌を内側に向けている。「大英博物館展覧漢代六博俑及其背後的生死観念」（澎湃新聞 2017）などこれらの遺物の関連論文に拍手と明記されているものはないが、新聞および雑誌記事である遊暁鵬「踏着伝説尋踪六博」（遊 2015）、王惟一「失伝的六博遊戯」（王 2018）、博古格物「什麽是六博」（博古格物 2019）には拍手であると明記されている。以上から、図 1.9 の勝者は拍手しているとする解釈が妥当であると考える。

図 1.11 東漢六博俑『澎湃新聞』2017

5.1.9「彩絵陶楽舞俑」

ニューヨークのメトロポリタン美術館に保管されている漢代の「彩絵陶楽舞俑」である。発掘時期、発掘場所などは不明である。2018 年 8 月 22 日の SINA 新聞「漢《彩絵陶楽舞俑》」には、1 体が踊り、1 体が筝を弾き、1 体が拍手していると記されている（中国芸術品収蔵 2018）[*9]。高さ 13.3-3.7 cm、横幅 10.8-13.3 cm、前後の幅 5.7 cm、「七盤舞」の場面が表現されている。5.1.2 の「漢復釉陶婦人俑」に類似している俑であるため、可能性が極めて高いに含めた。

図 1.12 彩絵陶楽舞俑『中国芸術品収蔵』2018

5.1.10「済源東街明代壁画」（現地調査済）

2012 年 1 月に河南省済源市東街明代壁画墓で出土した明代（1368-1644）の壁画「済源東街明代壁画」における西壁の二番目に、拍手する女官が描かれている。「済源東街明代壁画」は済源博物館に保管されている。この女官は右側の笙を吹いている女官を見ながら、両掌を胸先に上げ、拍手している。「済源市東街明代壁画墓発掘簡報」（済源市文物工作隊 2013:10-16）は、手拍子としての拍手が造形されていると記している。

図 1.13 済源東街明代壁画『済源市東街明代壁画墓発掘簡報』2013

5.2 拍手である可能性が高い遺物

5.2.1「西漢複釉陶打拍俑」（現地調査済）

2003 年 5 月 5 日に河南省済源市沁北電工場 M10 墓で出土した前漢（前 206-後 8）の「西漢複釉陶打拍俑」であり、現在は済源博物館に保管されている[*10]。帽子をかぶり、ロングスカートを穿き、両腕を上方に伸ばし、舞いながら拍手しているように見える。先述した「済源西窯頭村 M10 出土陶塑器物鑑賞」には、手を拍つ舞踊が造形されている可能性があると記されている（李 2010:101-104）。済源市博物館の展示のキャプションには、手拍子であると記されている。

図 2.1 西漢複釉陶打拍俑「済源博物館」

5.2.2「彩絵百戯陶俑」（現地調査済）

河南省洛陽市洛陽漢墓で出土した後漢の「彩絵百戯陶俑」の 1 体であり、現在は洛陽博物館に保管されている。

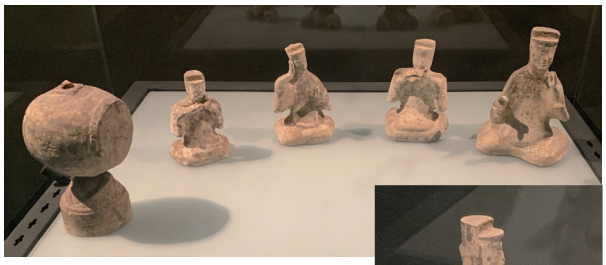

図 2.2 彩絵百戯陶俑「洛陽博物館」

図 2.3 彩絵百戯陶俑（右端）

2019 年 8 月に現地調査を行ったときには、4 体が展示されていたが、本来は 7 体一組である。報告書が未刊行であり不明な点が多いが、拍手を造形した右端の俑は、他の 6 体より明らかに大きく、角度を変えた写真で見ると、左手を上から右手を下から拍つ構えであることがわかる。なお、右 3 体目の首を傾げ右手を耳近くに当てている俑は、観客である可能性もあるが、『南陽漢代画像石』（南陽漢代画像石編集委員会 1985）などを参照すると、歌手の造形であるとも考えられる。これらを考慮すると、右端の俑は、手拍子でリズムをとる、もしくは観客による拍手の両方の可能性がある。

5.2.3「陶舞楽雑技俑」

1969 年に河南省済源市泗澗沟の M24 墓で出土した前漢の「陶舞楽雑技俑」であり、現在は公開されていない。雑技俑 1 体、舞俑 2 体、拍手俑 2 体の、5 体一組で、漢代の曲芸の場面を描いている。先述の「済源出土的漢代舞楽俑浅析」（劉恵 2017:10）及び「済源泗澗溝三座漢墓的発掘簡報」（河南省博物院 1973:52）には、左 2 体目の俑は、音楽に合わせた拍手が造形されていると記されている。拍手であるとすれば、リズムを刻む手拍子と解釈することもできるが、この俑群には、楽器を持っている演奏俑が見られないので、称賛の拍手が造形されている可能性も考えておきたい。なお、拍手俑を伴う俑群において演奏俑が見られない俑群は他に見つかっていない。

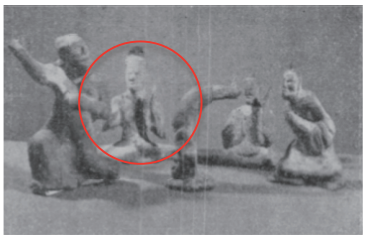

図 2.4 陶舞楽雑技俑『済源泗澗溝三座漢墓的発掘簡報』1973

5.2.4 将軍俑墓の俑

本稿で取り上げる拍手遺物のほとんどは、演奏の一部として手拍子でリズムをとるか、もしくは観客として賞賛する拍手であるが、この将軍俑は、礼敬として手が拍たれている可能性がある遺物である。2018 年に四川省自貢市富順県富世鎮北湖公園の工事現場に発掘された将軍俑墓で複数の俑が発見された（矢向 2021: 30）。同年 7 月 24 日の捜狐新聞には、 鎮墓将軍俑 1 体（高さ 104cm）、双頭俑 1 体（横幅 34cm）、立俑、拍手俑、侍女俑 17 体（高さ 26-42cm）、欠損した立俑 11 体（21-30cm）が記されている（富 2018）。2021 年 10 月現在、報告書が未刊行であるため、時代等の詳細は不明であるが、漢代から唐代に至る時期に造形されたと考えられる釉陶の俑である。右から 3 体目の侍女俑は、両掌を胸の位置で開いている。両腕の幅は肩幅よりやや狭く、物を持っている可能性はあるが、手を拍っているように見える。周囲の侍女俑は、両手を胸前で組み合わせる拱手俑であり、奏楽や舞踊の俑が見られないため、侍女俑が拍手俑であるとすれば、歌舞に伴う拍手ではなく、礼敬として両掌を当てる瞬間が造形されている可能性が高いと考えられる。

5.2.5「北斉黄釉磁扁壺」（現地調査済）

1971 年に河南省安陽市範粹墓で出土した北斉（550-577）の「黄釉磁扁壺」は、現在は河南博物館に保管されている。壺の紋様に 5 人が描かれているが、中央の男は踊り、両側の 4 人はそれぞれ楽器を持ち演奏している。右から 2 番目の人物は拍手しているように見える。この人物は指先を開いているが、楽器を持つのであれば指先を閉じると考えられるからである。2006 年の『帯你走進博物館：河南省博物館』（河南博物館 2006）には、手拍子とし

図 2.5 北斉黄釉磁扁壺『帯你走進博物館:河南省博物館』2006

ての拍手が描き出されていると記されている。

5.2.6「東漢婺州窯青瓷堆塑罐」（現地調査済）

1973 年 8 月に浙江省武義県で出土した後漢（25-220）の「東漢婺州窯青瓷堆塑罐」である。この堆塑罐は、高さ 41.5cm、口の直径 2.5cm、腹の直径 23.5cm であり、現在は浙江博物館に保管されている。罐上部では、中央の大きな人物を囲んで 4 人がそれぞれ楽器を演奏している。下部では、中央の倒立芸をしている人物に対し、両側の 2 人が正座して掌を合わせ拍手をしているように見える。浙江博物館の展示のキャプションには、両側の 2 人は観客であるとのみ記されている。興味深い堆塑罐であるが、そもそも人物が造形されている堆塑罐の研究を見つけることができない。

図 2.6 東漢婺州窯青瓷堆塑罐「浙江博物館」

図 2.7 婺州窯青釉堆塑人物罐『漢晋時期浙江青瓷堆塑谷倉罐』2012

5.2.7「婺州窯青釉堆塑人物罐」

1973 年 8 月に浙江省武義県桐琴果園三国墓で出土した三国時代（220-280）の「婺州窯青釉堆塑人物罐」である。発掘場所、及び造形内容は上記の「東漢婺州窯青瓷堆塑罐」とおおよそ一致する。現在の保管場所は不明であるが、2012 年の「漢晋時期浙江青瓷堆塑谷倉罐」（蒋・徐・朱 2012:50-52）には、「拍手」が造形されていると記されており、観客の拍手と演奏者の手拍子の両方の可能性があると述べられている。しかし、「東漢婺州窯青瓷堆塑罐」の展示キャプションに観客であるとのみ記されていることを考慮すると、演奏家の手拍子である可能性は低いと考えられる。

5.2.8「宴飲奏楽画像磚」

河南省新野県に出土した後漢（25-220）の画像石「宴飲奏楽画像磚」であり、横幅 38cm、高さ 40cm、現在は河南博物館に保管されている。両側の 2 人が楽器を演奏しており、中央の人は拍手しているように見える。3 人の位置関係から、中央の人は手拍子をとり指揮者の役割を果たしている可能性があると考えられる。3 人の前に机と酒杯が置かれており、貴族の宴会の場面と考えられる。

図 2.8 宴飲奏楽画像磚「河南博物館」

5.2.9「漢代画像石祠」

2019 年 1 月に安徽省淮北市で発掘された漢代（前 206-後 220）の祠の右側壁石に、拍手する人が描かれている壁画がある。「安徽省淮北市発見漢代画像石祠」（淮北市文物局 2019:19-25）によると、この壁石は、楼閣、六博、曲芸を描いたものであり、閣内で 2 人が六博を対局し、楼の外で弄丸（お手玉）を演じている

図 2.9 漢代画像石祠『安徽省淮北市発見漢代画像石祠』2019

場面を描いており、左側の 2 人がそれに向けて手を拍っている。画面に、楽器を持っている人物は見られないので、手を拍っているとすれば、観客として、称賛の拍手を送っている可能性があると考えられる。

5.2.10「宴楽図」

2017 年の「陝西靖辺県楊橋畔渠樹壕東漢壁画墓発掘簡報」に、2015 年に陝西靖辺県で発掘された東漢壁画墓の壁画「宴楽図」の中に拍手が描かれていると報告されている（陝西省考古研究院靖辺県文物管理弁公室

図 2.10 宴楽図『陝西靖辺県楊橋畔渠樹壕東漢壁画墓発掘簡報』2017

2017:3-26）。画面には、庭で 1 人の女性が舞い、右と左に 3 人ずつの客が座している情景が描かれている。発掘簡報には、右 3 人は称賛の拍手が描かれていると記している。右 3 人のうち左側の人物は見にくいが、右側 2 人の袖の形と位置から判断すると、手を胸の高さで、肩幅とほぼ同じ幅に保ち、両掌を開こうとする瞬間が描かれている可能性を指摘することができる。

5.3 拍手である可能性がある遺物

5.3.1 写真から拍手の可能性を指摘できる遺物

資料と写真から拍手の可能性を指摘できる遺物、及

び写真のみから拍手の可能性を指摘できる遺物の例を述べる。

5.3.1.1「陶舞俑与陶楽俑」

1955 年に広東省広州市先烈路で出土した後漢（25-220）の舞楽場面を描いた「陶舞俑与陶楽俑」であり、現在は広州博物館に保管されている。同地からは楽器

図 3.1 陶舞俑与陶楽俑「広州博物館」

を弾いている俑 1 体、拍手俑 2 体、舞俑 1 体の 4 体一組が発掘された。舞俑は写真にないが、他の 3 体より 2-3 倍大きい。広州博物館の展示のキャプション[*11]には、手を拍つ 2 体の陶楽俑は、舞に対して手拍子として拍手していると記されている。両手の位置から楽器や物を持っている可能性もないではないが、俑の配置から拍手の可能性があると考えられる。

5.3.1.2「四人楽舞銅飾牌」

1956 年に雲南省晋寧石寨山で出土した漢代の笙歌の場面を描いた「四人楽舞銅飾牌」であり、現在の保管場所は不明である。4 人のうち、1 人が瓢箪のような楽器を演奏し、3 人が拍手しながら歌っているように見える。陳萬鼐の「試以漢代音樂文獻及出土文物資料研究漢代音樂史 7:討論漢代打擊奏楽器与西南夷民族楽器」（陳 1998:18）には、「発掘報告書に、音楽に合わせて、拍手していると明記されている」と書かれている。しかし、発掘報告書は現時点で未公開であり確認できない。3 人は拍手するために手を広げていると考えられないことはないが、舞踊の動作として手を広げているとも考えられる。

図 3.2 四人楽舞銅飾牌-1
『試以漢代音樂文獻及出土文物資料研究漢代音樂史』1998

図 3.3 四人楽舞銅飾牌-2
『試以漢代音樂文獻及出土文物資料研究漢代音樂史』1998

5.3.1.3「漢画像石」

この画像は、年代、発掘時期、発掘場所、名称、現在の保管場所などが不明であり、関連資料も見つからないので、ここでは「漢画像石」と仮称する。SINA のブログ記事「図説漢朝的漢画像石-漢朝的戯劇院和游楽場」(2013) [*12] によると、画像は漢代の劇場と娯楽活動を描いたものであり、上段に曲芸の模様が描かれ、左に 10 人、右に 2 人の観客がいる。同記事には、音楽、

図 3.4 漢画像石『図説漢朝的漢画像石—漢朝的戯劇院和游楽場』2013

舞踊、スポーツ、演劇（東海黄公劇など）を一体化した演出が漢代に流行していたとある。描かれた 12 人は、楽器を持ってはいないが、手を拍っているかどうかも判別できない。描かれている位置から、観客の可能性は高いと考えられる。手の形状は確認できないが、手の位置が胸先近くであるので、拍手である可能性もないとは言えない。

5.3.1.4「敦煌壁画 254 窟」

甘粛省敦煌市の東南 25km に位置する鳴沙山の東の断崖に南北に 1,600m に渡り掘られた莫高窟がある。その壁面には一面に壁画が描かれ、敦煌壁画と呼ばれる。その 254 窟にある「尸毘王本生故事画」に、「割肉救鳩」の故事を描いた北魏時代の仏教壁画がある[*13]。画面を見ると、左下の 3 人のうち、1 人は尸毘王の膝を優しく抱え、1 人は背を向け話しているが、左端の 1 人は、顔を尸毘王に向け、手首を狭め、手先を上方に向け広げている。拍手しているようにも見える。この壁画は尸毘王の病気治癒の喜びを表現するものであると考えられるため、もし拍手であるとすれば、喜びの拍手が造形されていると考えられる。

図 3.5 敦煌壁画254窟尸毘王本生故事画（割肉救鳩）

5.3.1.5「奏楽舞蹈図」及び「奏楽宴飲舞蹈図」

2000 年 5 月に陝西省西安市で北周時代の安伽墓が発掘された。2003 年 8 月 1 日に文物出版社から出版された『西安北周安伽墓』には、安伽墓の構造と出土文物が詳しく説明されている（陝西省考古学研究所 2003: 25, 34）。まず、正面屏風第一の「奏楽舞蹈図」の画面上部には、前方に 4 人、後方に 6 人が描かれている。前方の左から 2 人目は主人であり、両側の 2 人が楽器を演奏し、右端の人は缶を持つ召使と考えられる。図

図3.6 奏楽舞蹈図『西安北周安伽墓』2003

図3.7 奏楽宴飲舞蹈図『西安北周安伽墓』2003

を見ると、後方の 6 人は、片手のみを胸元から首の高さに上げている。考古学と中国音楽史の文献を調べたところ、この姿勢に対応する楽器が想定されず、片手のみではあるが、拍手が描かれている可能性があると考えられる。次に、正面屏風第六の「奏楽宴飲舞蹈図」の画面下部の右側には、2 人が「奏楽舞蹈図」と同じく片手のみを首の高さに上げている姿が描かれている。手は胴から離れて舞手に向けられており、拍手が描かれている可能性があると考えられる。『西安北周安伽墓』及び孫武軍の「北朝隋唐入華粟特人墓葬図像的文化与審美研究」（孫武軍 2012:221）にも、拍手する姿と明記されている。手拍子でリズムを取っているとも、称賛の拍手であるとも考えられる。

5.3.1.6「拍手高歌女坐俑」

1953 年に西安南郊草工場坡村に発掘された北朝墓の中から声を発していると考えられる女性の俑 1 体が出土した。現在の保管場所は不明である。この俑は、両手を顔の位置に上げ、平行に開き、口が開いていることから、声を掛けているか歌っているかのどちらかであると考えられる。一方、陝西省文物管理委員会による発掘報告書「西安南郊草工場坡村北朝墓的発掘」には、「拍手高歌女坐俑」と記されている（陝西省文物管理委員会 1959:285-287）。拍手しながら歌っていると考えることもできないわけではない。

図3.8 拍手高歌女坐俑『西安南郊草工場坡村北朝墓的発掘』1959

5.3.1.7「彩絵陶院落」

1981 年に河南省淮陽于庄で発掘された「彩絵陶院落」に、6 体一組の陶楽俑が発見された。博物館のホームページには、男の俑は正座し、赤い服を着て、拍手しているとある。『中原文物』に掲載された「淮陽于庄漢墓発掘簡報」（駱崇礼・駱明 1983：1-3）には、合掌俑と名づけられているが、それに関する説明はない。写真を見ると、物を持っていると考えられなくはないが、両掌を交差させ当てようとする瞬間が造形されている可能性もある。

図3.9 彩絵陶院落『淮陽于庄漢墓発掘簡報』1983

5.3.1.8「銅鼓残片笙歌紋飾」

雲南省晋寧石寨山で発掘された「銅鼓残片笙歌紋飾」であり、発掘時期、現在の保管場所は不明である。中国古代の笙歌を演奏している姿が描かれている。先述の「試以漢代音樂文獻及出土文物資料研究漢代音樂史」（陳 1998:18）には、船先の 1 人が楽器を持ち、後方の複数の歌手が歌いながら手拍子を拍つとある。画面を見ると、歌手の両手は胸先から肩の位置まで上がり、大きく広げられている。拍手の可能性はあるが、手を上げて歌っている可能性もあると考えられる。

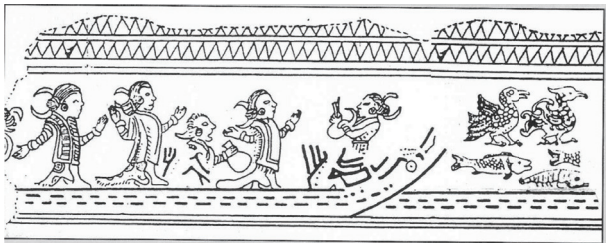

図3.10「銅鼓残片笙歌紋飾」『試以漢代音樂文獻及出土文物資料研究漢代音樂史』1998

5.3.1.9「戦国水陸攻戦紋銅壺」

1965 年に四川省成都市百花潭中学から出土した「戦国水陸攻戦紋銅壺」である。四川省博物館の館長盛建武は、2018 年 8 月 21 日のインタビュー[*14]でこの銅壺について、「上段は戦国時代の採桑の場面を描いている。桑葉を摘む人と運ぶ人が描かれているが、木の下

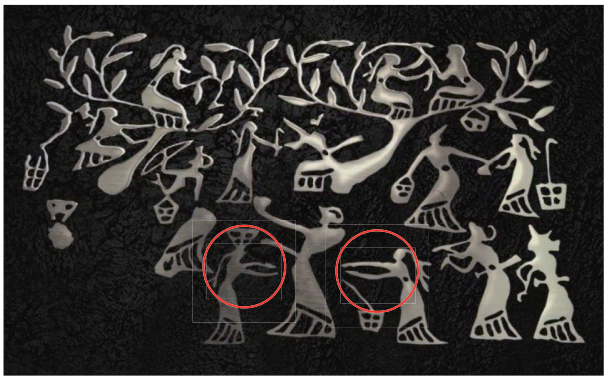

図3.11 戦国水陸攻戦紋銅壺「四川省博物館」

で大人が舞っている。舞い手の隣で 2 人の采桑女が舞い手の方を向いて拍手している」と述べている。「戦国水陸攻戦紋銅壺」は戦国時代（前 475-前 221）の遺物であり、拍手が描かれているとすれば、漢代以前に拍手遺物が存在することが確かめられたことになる。但し、写真のように肘を伸ばして拍つ拍手は、一般的な拍手の拍ち方ではないので、拍手であると断ずることはできない。

5.3.1.10「司馬金龍墓女楽俑」

1965 山西省大同市石家寨で発掘された司馬金龍墓耳室及び前室北側において出土した 12 体の女性の楽俑のうち、左上の女楽俑は、拍手する姿が造形されている可能性がある。これらの楽俑は大同市博物館に保管されており、高さは平均すると 15-20.5cm、服装はどれも同じであるが、姿勢はそれぞれ異なる。左上の正座している女楽俑は、左手首が欠けているが、拍手している俑である可能性があると考えられる。大同市考古学研究所による「大同北魏平城絲路遺珍」（古 2015：21-32）には、「両手を上げて拍手している」と記されている。

図3.12 司馬金龍墓女楽俑『大同北魏平城絲路遺珍』2015

5.3.2 拍手であるとする言説があるが写真から確認できない遺物

5.3.2.1「七槃舞」

1950 年に山東省沂南県で出土した漢代壁画「七槃舞」であり、現在は四川博物館に保管されている。1957 年 8 期の『文物参考資料』に掲載された「論盤舞」（馮 1957:11）によると、古代舞踊の一種である七槃舞では、手を楽器とともに拍ち槃舞を伴奏する。漢代壁画「七槃舞」を見ると、画面中央の女性が舞い、右下の人は弄玉をしている。両掌を開いてはいるが、あくまで弄玉であり拍手しているのではないと考えられる。

図3.13 七槃舞『論盤舞』1957

5.3.2.2「楽舞飲茶画像」

図3.14 楽舞飲茶画像『漢代的茶文化』2005

河南省南陽市麒麟崗で出土した後漢（25-220）の宴会場面を描いた「楽舞飲茶画像」であり、現在は南陽漢画館に保管されている。画面は 5 人で、左端の人は楽器を演奏しており、残り 4 人は音楽を鑑賞しながら話している。画面を見る限り、拍手する姿は明確ではないが、複数の記事が、右から 2 人目が拍手していると記している（張敦「漢代的茶文化」（張 2005）、「从画像石看漢代如何搞 party」（山茶的流芳地 2015））。しかし、現時点で発掘報告書は未刊行である。両掌を当てようとする瞬間が造形されている可能性がなくはないが、杯などを持っている可能性が高いと考えられる。

5.3.2.3「楽舞図」

浙江省徐州市銅山県苗山に出土した後漢（25-220）の宴会場面を描いた漢画像石「楽舞図」であるが、個人蔵であり非公開である。写真を見る限り、拍手する姿勢は見出だせないが、2019 年 11 月に画像研究者孫宝山はインタビュー[*15] で、図中の 1 人が手拍子として手を拍っているとの見解を示している。

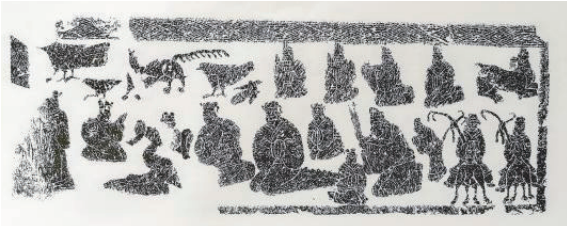

図3.15 楽舞図 個人蔵

5.3.2.4「北壁二原石」

山東省微山県両城郷に出土した漢代扁鵲祠堂「北壁二原石」である。2014 年に王洪震は「漢画像石所反映的医学与養生」で、画面右側で手を大きく広げている人は、手を拍っていると述べている（王 2014: 46-59）。しかし、現在の保管場所は不明である。

図3.16 北壁二原石『漢画像石所反映的医学与養生』2014

5.3.2.5「甘粛酒泉丁家閘墓室壁画」

1977 年 5 月、甘粛省博物館と酒泉教育局は、酒泉及び嘉峪関で発掘調査を行い、丁家閘村の近隣で、魏晋十六国時代(220-420)と考えられる大、中、小型墓を発掘した。その M5 西壁第三階における「燕居行楽図」には、拍手が描かれている可能性がある。画面中央の机の左側には 2 人の女性が見えるが、左側の人は踊り、もう 1 人は手を拍っているように見える。謝敏の「酒泉丁家閘門墓室壁画探析」（謝 2015:12）には、音楽と舞踊のリズムをとる手拍子であると述べられている。

図3.17 甘粛酒泉丁家閘墓室壁画『酒泉丁家閘門墓室壁画探析』2015

5.3.2.6「北壁浮彫」

2005 年第 3 期『文物』に掲載された「西安北周涼州薩保史君墓発掘報告」（西安市文物保護考古研究所 2005:12）に、この史君墓の遺物についての説明がある。史君墓は安伽墓から 2.5 キロ離れた北周時代の墓である。写真では見にくいが、発掘報告には、左側に描かれている主人の柱を挟んだ右側に位置する侍従が手を拍っていると記されている。手を拍っているようでもあるが、両手を差し出しているようにも見える。

図3.18 北壁浮彫『西安北周涼州薩保史君墓発掘報告』2005

5.3.2.7「宴飲百劇図」

1960 年河南省新密市牛店鎮で発掘された打虎亭漢墓から、壁画「宴飲百劇図」が発見された。発掘報告書は見つけられず、現在の保管場所は不明である。『文化研究』に掲載された巫允明の「中国古舞文化鈎沈―漢墓壁画与器物上的楽舞百戯」（巫 2018:57）には、左 2 人目に座っている男性は手を拍っていると記されている。しかし、写真からは確認できない。

図3.19 宴飲百劇図『中国古舞文化鈎沈―漢墓壁画与器物上的楽舞百戯』2018

5.3.2.8「撫琴・長袖・出喪」

江蘇省徐州市沛県に出土した漢代の画像石「撫琴・長袖・出喪」であり、CCTV 民俗チャンネルの紀要「石の史詩―漢画石に近づく」（郭 年不詳）[*16] 第四編で紹介された画像である。現在の保管場所は不明である。画質は悪く確認できないが、左 2 人の女性が長袖舞を演じ、1 人が琴を弾き、右の女性は座して拍手していると説明されている。

図3.20 撫琴・長袖・出喪『CCTV』

5.3.2.9「彩絵陶舞蹈俑」

河南省済源市桐花溝で発掘された後漢（25-220）の「彩絵陶舞蹈俑」であり、王蔚波「試論河南漢代彩絵陶俑芸術」（王 2009:33）と巫允明の「中国古舞文化鈎沈―漢墓壁画与器物上的楽舞百戯」（巫 2018:63）に踊りながら拍手していると記されている。しかし、俑の掌は外側に向けられ、両掌を合わせる拍手動作が見られない。舞踊の身振り動作の中の手の動きと考えられる。

図3.21 彩絵陶舞蹈俑『試論河南漢代彩絵陶俑芸術』2009

5.3.2.10「彩絵百戯楽舞陶俑群」

河南省博物館に保管されている「彩絵百戯楽舞陶俑群」である。2012 年に河南博物院は偃師市で 23 体の「彩絵百戯楽舞陶俑群」を入手した。漢代の俑で出土地域は不明、吹簫俑 6 体、吹塤俑 2 体、持物伎楽俑 6 体、拍手俑 2 体と、腕なし楽俑 3 体、百戯俑 3 体、舞俑 1 体である。前右 2 人目の拍手俑は、写真からははっきりと確認できないが、両手を上げ、掌を合わせ

図3.22 彩絵百戯楽舞陶俑群『河南博物院徴集漢代彩絵楽舞百戯陶俑群』2016

て拍手しているようにも見える。もう 1 体の拍手俑は、中列左 3 体目で、両手を胸先まで上げ、右手を上、左手を下にして、両掌を向き合わせて拍手しているように見えるが、写真からそれは明確でない。熊麗萍の「河南博物院徴集漢代彩絵楽舞百戯陶俑群」（熊 2016:77-79）には、拍手が造形されていると記されている。

5.3.2.11「対牛弾琴図」

長らくネット上で写真が公開されていた漢画像石の「対牛弾琴図」は、描き方の特徴から、後漢（25-220 年）末期と推測される。「対牛弾琴」は、戦国時代の公明儀が牛のために音楽を演奏した話で、後漢に撰せられた「牟子理惑論」に現れる。「対牛弾琴図」の全体は、横幅 67cm、高さ 100cm であると説明されていたが、発掘時期、発掘場所、保管場所は不明、現在はリンクがなく、発掘報告書、論文も見あたらない。中央で琴を演奏する人に対して、左側の牛が手を拍っているように見える。手が 1 本しか描かれていないので、拍手であるのかは明確ではないが、手を拍っているとすれば、称賛の拍手であると考えられる。右側の 3 人は観客であると考えられる。

図 3.23 対牛弾琴図

5.3.2.12「孔子拝老聃図」

江蘇省徐州市に出土した漢代「孔子拝老聃図」であり、現在は馬鞍山博物館に保管されている。壁画全体の長さ 147cm、幅 110cm で、画面は上下二段に分けられている。

図 3.24 孔子拝老聃図「馬鞍山博物館」

下段は孔子が老子に謁見し教えを乞う場面を描いているが、図に示した上段は闘技の場面を描いており、長い矛で突き合う 2 人の後方で、それぞれ 2 人が声を掛けながら拍手で応援しているように見える。しかし、描写が荒いので拍手であるかははっきりと確認できない。馬鞍山博物館の展示のキャプション[*17] には、観客として、拍手していると記されている。

5.4 不明の拍手

文献資料に拍手と記されているが、写真が存在しないため、拍手する可能性が判断できない例を挙げる。

5.4.1「鐘鼓管弦楽団画像石」

2009 年に出版された馮建志・呉金宝の『漢代音楽文化研究』（馮・呉 2009:188）は、河南省南陽七里園東漢墓から出土した後漢（25-220）の鐘鼓の楽団を描いている画像石について論じている。1 人の演者は手拍子として拍手していると記されている。

5.4.2「新野樊集撃鼓歌唱画像磚」

2011 年に出版された李栄有の『漢画像的音楽学研究』（李 2011:107）には、河南省南陽新野樊集で発掘された「撃鼓歌唱画像磚」を例に、漢代の画像には、手を拍ちながら歌う場面が数多くあることが、説明されている。

6.終わりに

本稿では、考古資料から拍手の可能性がある例を取り上げ、それらの造形や描写について、特徴や表現方法を検討することを目的とした。拍手であるかどうか判断が難しい例、どのように拍っているか判然としない例も多いが、拍手であることが明確である場面の例を、数多く提示することができた。手の拍ち方に関して、文献研究からは、実際にどう拍たれていたのか知ることはできないが、拍手の可能性が高い考古資料からであれば、それらを具体的に知ることができる。それらの例を提示した本稿の資料は拍手研究に貢献しうるものであると考える。以下、若干の考察を述べておこう。まず、考古資料にみられる拍手の多くは、音楽とともに拍たれている手拍子である。そのことから、手拍子としての拍手、すなわち、舞踊のリズムに合わせて手を拍つ行為、演奏の一部として手を拍つ行為が、漢代において頻繁に行われていた行為であることを改めて知ることができた。また、観客が称賛するために拍手していると検討される例も、それほど多くはないが存在することがわかった。この時の観客の称賛が、手拍子による称賛であるのか拍手で称賛しているのかまではわからないが、音楽や舞踊に対する喜びや称賛を表現する行為として手が拍たれていたことがわかる。次に、拍手とは言っても、考古資料にみられる拍手はそれぞれ異なる拍ち方が造形され描かれていることから、さまざまな姿勢でいろいろな拍ち方がなされていたことがわかる。手を広げて拍つ例、近づけて拍つ例、伸ばして拍つ例、縮めて拍つ例、胸先で拍つ例、頭上で拍つ例、左右の掌をピタリと合わせて拍つ例、掌を交差させて拍つ例など、文献からは知ることができない拍ち方の差異と多様性の存在を、考古資料から知ることができる。そのことは、拍手が日常的な振る舞いであるとともに、状況に応じてさまざまに変化しうる振る舞いであることを示すものでもある。拍手に関する考古資料の情報は今後増えていくかもしれないが、漢代を中心に網羅的に調査した本報告は、中国における拍手の起源を探るために不可欠な資料になっていると考える。

註

*1　本稿の漢籍・中国語文献の書名及び引用文は原則として日本の常用字体を用いているが、必要に応じて原書の字体を用いた。

*2　表 1 の遺物の評価において、論は論文・専門書、記は新聞記事・雑誌記事・研究者のブログ記事、報は発掘報告書、博は博物館の展示キャプション、筆は筆者の判断を示す。

*3　http://www.jysmuseum.com/bencandy.php?fid=89&id=1391（済源博物館　西漢複釉陶坐俑 2021 年 12 月 15 日取得）
http://www.jysmuseum.com/bencandy.php?fid=89&id=1386（済源博物館　西漢複釉陶坐俑 2021 年 12 月 15 日取得）

*4　http://www.jysmuseum.com/bencandy.php?fid=89&id=1393（済源博物館　漢復釉陶拍手俑 2021 年 12 月 15 日取得）

*5　https://baike.baidu.com/item/%E8%A5%BF%E6%B1%89%E8%B5%B5%E6%B0%8F%E5%AD%A4%E5%84%BF%E5%9B%BE/5025417（西漢趙氏孤児図 2021 年 12 月 15 日取得）

*6　https://baike.baidu.com/item/%E5%8C%97%E9%AD%8F%E5%BD%A9%E7%BB%98%E6%9D%82%E6%8A%80%E8%83%A1%E4%BF%91/17351801?fr=Aladdin（北魏彩絵雑技胡俑 2021 年 12 月 15 日取得）

*7　http://www.xcmuseum.com/db_app/search.aspx（許昌博物館 2021 年 12 月 15 日取得）

*8　https://artsandculture.google.com/asset/%E4%BB%99%E4%BA%BA%E5%85%AD%E5%8D%9A%E5%9B%BE%E7%9F%B3%E5%87%BD/VwGGx473NhAhpA（四川博物院　仙人六博図石函 2021 年 12 月 15 日取得）

*9　http://k.sina.com.cn/article_2197376813_p82f94f2d02700ahry.html?from=cul&display=0&retcode=0（中国芸術品収蔵　漢《彩絵陶楽舞俑》 2021 年 12 月 15 日取得）

*10 http://www.jysmuseum.com/bencandy.php?fid=89&id=1387（済源博物館　西漢複釉陶打拍俑 2021 年 12 月 15 日取得）

*11 https://www.guangzhoumuseum.cn/history03-03.asp（広州博物館陶舞俑与陶楽俑 2021 年 12 月 15 日取得）

*12 http://blog.sina.cn/dpool/blog/s/blog_669e82e701018135.html（図説漢朝的漢画像石-漢朝的戯劇院和游楽場 2021 年 12 月 15 日取得）

*13 http://www.chinabuddhism.com.cn/tp/2017-03-04/5009.html（中国仏教協会　敦煌壁画 254 窟 尸毗王本生故事画(割肉救鳩) 2021 年 12 月 15 日取得）

*14 http://www.yidianzixun.com/article/0Jr4utHh（文博在線　盛建武:一方銅壺銘記時代瞬間　2021 年 12 月 15 日取得）

*15 https://baijiahao.baidu.com/s?id=1651150490097454752&wfr=spider&for=pc（古物鑑蔵部落　漢画像石是民族芸術瑰宝 拓片是貴重文化財富　2021 年 12 月 15 日取得）

*16 http://www.cctv.com/folklore/special/C13447/20050302/101534_1.shtml（央視国際 各具特色的漢画専題 陰柔織巧 墓形追神―沛県龍固新出土的一組漢画像石　2021 年 12 月 15 日取得）

*17 http://www.mas-museum.com/news/2002/2/20022804373719262916.html（馬鞍山博物館　2021 年 12 月 15 日取得）

引用文献

1）秦睿澤・矢向正人「中国の古代文献にみる拍手の起源」『比較文化研究 125』2017:23-36.
2）矢向正人「魏志倭人伝に現れる搏手からの検討」『芸術工学研究 34』2021:19-36.
3）吉田賢抗『新釈漢文大系八十六巻 史記六（世家中）』明治書院 1979:576-577.
4）矢向正人「拍手の起源を探る」『芸術工学研究 24』2016:21-41,59.
5）矢向正人「天の逆手:古事記の国譲りに現われた手拍ちの検討」『芸術工学研究 31』2019:19-31.
6）楊鵬・矢向正人「中国の拍手に見られるネガティブな感情反応」『芸術工学研究 32』2020:9-29.
7）張慶捷『考古発掘報告積圧問題』科学出版社 2011.
8）王先勝「中国考古学的現状 任務及未来趨勢：古代紋飾与古代研究新趨勢」『社会科学論壇』2019(2):130-141.
9）徐百柯「中国考古学の父：第一位遺跡発掘人李済」『北京青年報』2005 年 6 月 29 日.
10）胡成芳『泥土之魂：済源漢代陶器』中州古籍出版社 2015.
11）李彩霞「済源西窯頭村 M10 出土陶塑器物鑑賞」『中原文物』2010(4):101-104.
12）李暁音「済源出土漢代陶俑的美感表現」『東方収蔵』2015(5):53-56.
13）劉恵「済源出土的漢代舞楽俑浅析」 Journal of Jiyuan Vocational and Technical College(済源職業技術学院学報) 2017:8-12.
14）河南文物考古研究所「河南済源市桐花溝十号漢墓」『考古』2000(2):78-89.
15）河南省博物院「済源泗澗溝三座漢墓的発掘簡報」『文物』1973(2):46-54.
16）劉俊喜「大同雁北師院北魏墓群」『文物』2008(2):53-55.
17）張懐寧「河南洛寧東漢墓清理簡報」『文物』1987(2):37-42.
18）「遺産」『山西青年（SHANXIYOUTH）』2013 年 7 月 7 日:8.
19）呉艶麗「許昌博物館蔵百戯俑賞析」『理財・収蔵版』2018(2).
20）楊育彬・張長森・趙青雲「霊宝張湾漢墓」『文物』1975(11)：75-93.
21）「大英博物館展覧漢代六博俑及其背後的生死観念」『澎湃新聞』2017 年 6 月 15 日.
22）遊暁鵬「踏着伝説尋踪六博」『大河報』2015 年 1 月 9 日.
23）王惟一「失伝的六博遊戯」『大河報』2018 年 7 月 31 日.
24）博古格物「什麽是六博」『博古格物』2019:3.
25）中国芸術品収蔵「漢《彩絵陶楽舞俑》」『SINA 新聞』2018 年 8 月 22 日.
26）済源市文物工作隊「済源市東街明代壁画墓発掘簡報」『中原文物』2013(1)：10-16.
27）南陽漢代画像石編集委員会『南陽漢代画像石』文物出版社 1985.
28）富順人「1.4 米高！富順北湖公園発現古墓，出土鎮墓将軍俑！」『搜狐新聞』2018 年 7 月 24 日.
29）河南博物館『帯你走進博物館：河南省博物館』文物出版社 2006.
30）蒋金治・徐衛・朱佩麗「漢晋時期浙江青瓷堆塑谷倉罐」『東方収蔵』2012:50-52.
31）淮北市文物局「安徽省淮北市発見漢代画像石祠」『東南文化』2019(6):19-25.
32）陝西省考古研究院 靖辺県文物管理弁公室「陝西靖辺県楊橋畔渠樹壕東漢壁画墓発掘簡報」『考古与文物』2017(1):3-26.
33）陳萬鼐「試以漢代音樂文獻及出土文物資料研究漢代音樂史 7:討論漢代打擊奏樂器与西南夷民族樂器」『故宮文物月刊』1998:9-24.
34）孫武軍「北朝隋唐入華粟特人墓葬図像的文化与審美研究」『西北大学博士論文』2012
35）陝西省考古学研究所『西安北周安伽墓』文物出版社 2003.
36）侠西省文物管理委員会「西安南郊草工場坡村北朝墓的発掘」『考古』1959(6):285-287.
37）駱崇礼・駱明「淮陽于庄漢墓発掘簡報」『中原文物』1983(1):1-3.
38）古順芳「大同北魏平城絲路遺珍」『収蔵家』2015(3):21-32.
39）馮漢驥「論盤舞」『文物参考資料』1957(8):9-12.
40）張敦「漢代的茶文化」『SINA 新聞』2005.(月日不明)
41）不明「从画像石看漢代如何搞 party」『山茶的流芳地』2015 年 4 月 7 日.
42）王洪震「漢画像石所反映的医学与養生」『休閑読品・天下』2014:46-59.
43）謝敏「酒泉丁家閘門墓室壁画探析」『湖北美術学院』2015:1-28.
44）西安市文物保護考古研究所「西安北周涼州薩保史君墓発掘報告」『文物』2005(3):4-33.
45）巫允明「中国古舞文化鈎沈―漢墓壁画与器物上的楽舞百戯」『文化研究』2018:56-63.
46）郭翠瀟「石の史詩―漢画石に近付く」CCTV.2005.
47）王蔚波「試論河南漢代彩絵陶俑芸術」『四川文物』2009(2):31-36.
48）熊麗萍「河南博物院徴集漢代彩絵楽舞百戯陶俑群」『中原文物』2016(2):77-79.
49）馮建志・呉金宝『漢代音楽文化研究』河南大学出版社:2009.
50）李栄有『漢画像的音楽学研究』京華出版社:2011.

画像出典

図 1.1 西漢複釉陶坐俑-1
http://www.jysmuseum.com/bencandy.php?fid=89&id=1386(2021 年 12 月 15 日取得)
図 1.2 西漢複釉陶坐俑-2
http://www.jysmuseum.com/bencandy.php?fid=89&id=1391(2021 年 12 月 15 日取得)
図 1.3 漢復釉陶婦人俑
河南文物考古研究所「河南済源市桐花溝十号漢墓」『考古』2000(2):89.
図 1.4 漢復釉陶拍手俑
http://www.jysmuseum.com/bencandy.php?fid=89&id=1393(2021 年 12 月 15 日取得)
図 1.5 西漢趙氏孤児図
https://baike.baidu.com/item/西氏孤儿图/5025417(2021 年 12 月 15 日取得)
図 1.6 紅釉舞楽俑群
Journal of Jiyuan Vocational and Technical College(済源職業技術学院学報)2017:11.
図 1.7 西漢擊掌緑褐釉陶俑、西漢擊掌褐釉陶俑
呉艶麗「許昌博物館藏百戯俑賞析」『理財・収藏版』2018(2):41.
図 1.8 拍手俑
呉艶麗「許昌博物館藏百戯俑賞析」『理財・収藏版』2018(2):41.
図 1.9 仙人六博図石函
https://artsandculture.google.com/asset/%E4%BB%99%E4%BA%BA%E5%85%AD%E5%8D%9A%E5%9B%BE%E7%9F%B3%E5%87%BD/VwGGx473NhAhpA(2021 年 12 月 15 日取得)
図 1.10 東漢緑釉六博俑
楊育彬・張長森・趙青雲「霊宝張湾漢墓」『文物』1975(11):89.
図 1.11 東漢六博俑
https://www.thepaper.cn/newsDetail_forward_1693651(2021 年 12 月 15 日取得)
図 1.12 彩絵陶楽舞俑
http://k.sina.com.cn/article_2197376813_p82f94f2d02700ahry.html?from=cul(2021 年 12 月 15 日取得)
図 1.13 済源東街明代壁画　筆者撮影
図 2.1 西漢複釉陶打拍俑
http://www.jysmuseum.com/bencandy.php?fid=89&id=1387(2021 年 12 月 15 日取得)
図 2.2 彩絵百戯陶俑　筆者撮影
図 2.3 彩絵百戯陶俑　筆者撮影
図 2.4 陶舞楽雑技俑
河南省博物院「済源泗澗溝三座漢墓的発掘簡報」『文物』1973(2):52.
図 2.5 北斉黄釉磁扁壺
河南博物館『帯你走進博物館：河南省博物館』文物出版社 2006.(頁未確認)
図 2.6 東漢婺州窯青瓷堆塑罐　筆者撮影
図 2.7 婺州窯青釉堆塑人物罐
蔣金治・徐衛・朱佩麗「漢晋時期浙江青瓷堆塑谷倉罐」『東方收藏』2012:51.
図 2.8 宴飲奏楽画像磚
http://www.360doc.com/content/16/0328/11/4958641_545837507.shtml(2021 年 12 月 15 日取得)
図 2.9 漢代画像石祠后龛右側壁石
淮北市文物局「安徽省淮北市発見漢代画像石祠」『東南文化』 2019(6):21.
図 2.10 宴楽図
陝西省考古研究院 靖辺県文物管理弁公室「陝西靖辺県楊橋畔渠樹壕東漢壁画墓発掘簡報」『考古与文物』2017(1):8.
図 3.1 陶舞俑与陶楽俑
https://www.guangzhoumuseum.cn/history03-03.asp(2021 年 12 月 15 日取得)
図 3.2 四人楽舞銅飾牌-1
http://blog.sina.com.cn/s/blog_51ec9abf0102wzxo.html(2021 年 12 月 15 日取得)
図 3.3 四人楽舞銅飾牌-2
http://blog.sina.com.cn/s/blog_51ec9abf0102wzxo.html(2021 年 12 月 15 日取得)
図 3.4 漢画像石
http://blog.sina.cn/dpool/blog/s/blog_669e82e701018135.html(2021 年 12 月 15 日取得)
図 3.5 敦煌壁画 254 窟 尸毗王本生故事画(割肉救鳩)
http://www.chinabuddhism.com.cn/tp/2017-03-04/5009.html(2021 年 12 月 15 日取得)
図 3.6 奏楽舞蹈図
陝西省考古学研究所『西安北周安伽墓』文物出版社 2003:26.
図 3.7 奏楽宴飲舞蹈図
陝西省考古学研究所『西安北周安伽墓』文物出版社 2003:34.
図 3.8 拍手高歌女坐俑
陝西省文物管理委員会「西安南郊草工場坡村北朝墓的発掘」『考古』1959(6):285.
図 3.9 彩絵陶院落
駱崇礼・駱明「淮陽于庄漢墓発掘簡報」『中原文物』1983(1):2.
図 3.10 銅鼓残片笙歌紋飾
陳萬鼐「試以漢代音樂文獻及出土文物資料研究漢代音樂史 7:討論漢代打擊奏楽器与西南夷民族楽器」『故宮文物月刊』1998:11.
図 3.11 戦国水陸攻戦紋銅壺
http://www.yidianzixun.com/article/0Jr4utHh(2021 年 12 月 15 日取得)
図 3.12 司馬金龍墓女楽俑
古順芳「大同北魏平城絲路遺珍」『收藏家』2015(3):22.
図 3.13 七槃舞 (煉瓦画像)
馮漢驥「論盤舞」『文物参考資料』1957(8):11.
図 3.14 楽舞飲茶画像
http://blog.sina.com.cn/s/blog_59a2f3d20101fv0d.html(2021 年 12 月 15 日取得)
図 3.15 楽舞図 (漢画像石)
https://baijiahao.baidu.com/s?id=1651150490097454752&wfr=spider&for=pc(2021 年 12 月 15 日取得)
図 3.16 北壁二原石
王洪震「漢画像石所反映的医学与養生」『休閑読品・天下』2014.(頁未確認)
図 3.17 甘粛酒泉丁家閘墓室壁画
謝敏「酒泉丁家閘門墓室壁画探析」『湖北美術学院』2015:12.
図 3.18 北壁浮彫
西安市文物保護考古研究所「西安北周涼州薩保史君墓発掘報告」『文物』2005(3):9.
図 3.19 宴飲百劇図
巫允明「中国古舞文化鈎沈—漢墓壁画与器物上的楽舞百戯」『文化研究』2018:57.
図 3.20 撫琴・長袖・出喪
http://www.cctv.com/folklore/special/C13447/20050302/101534_1.shtml(2021 年 12 月 15 日取得)
図 3.21 彩絵陶舞蹈俑
https://auction.artron.net/paimai-art46000107/(2021 年 12 月 15 日取得)
図 3.22 彩絵百戯楽舞陶俑群
熊麗萍「河南博物院徴集漢代彩絵楽舞百戯陶俑群」『中原文物』2016(2):79.
図 3.23 対牛弾琴図
http://song8500.blog.sohu.com/157816817.html(2021 年 12 月 15 日取得)
図 3.24 孔子拝老聃図
http://www.mas-museum.com/news/2002/2/20022804373719262916.html(2021 年 12 月 15 日取得)